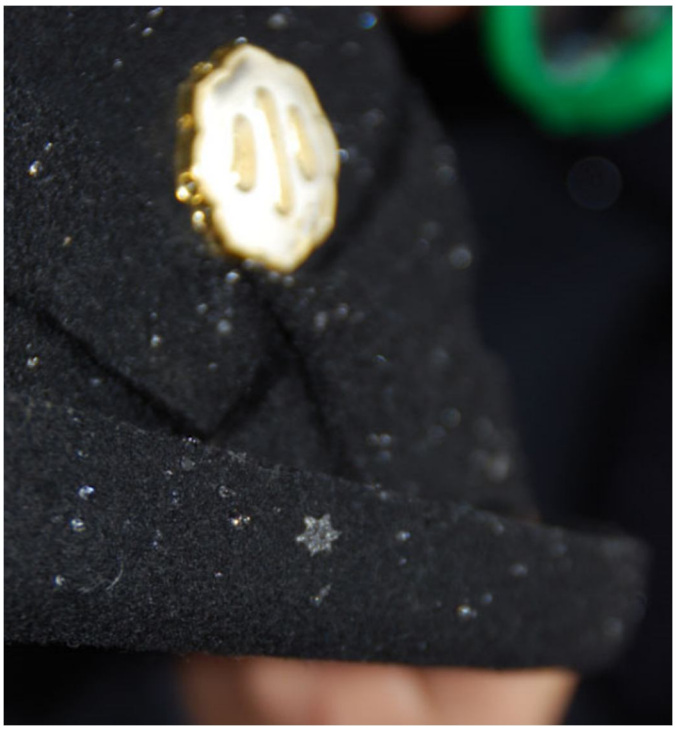
「日々の理科」（第 878 号） 2016（H28),12,-1

「11 月の雪を探究する（最終回)」

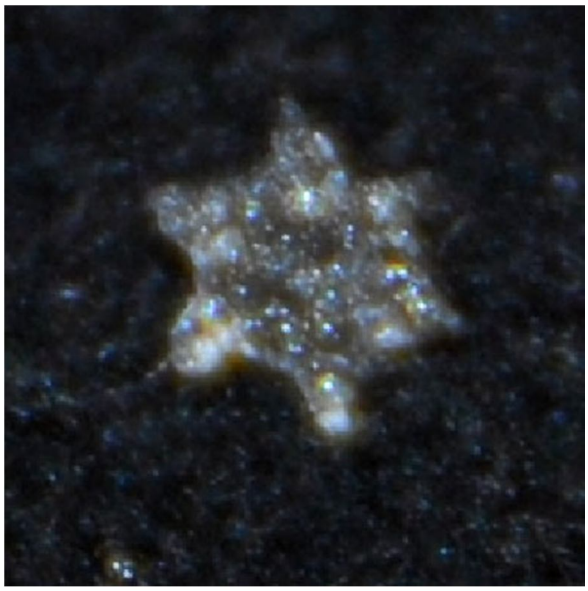
お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

東京に降る雪にも、稀に「ラッキー結晶」が混ざっていて、方法次第でうまく観察できることがわかった。しかし、それは布に落ちてから消えるまで、わずか 10 秒か 20 秒。一瞬の自然の美である。

これは男児の防寒着の袖に落ちた結晶。融け始めてはいるが、まだ「樹枝六花」の特徴を残している。



そして今回の観察で一番美しかった結晶がこの写真。「先生！帽子に、お茶の水のマークと同じ形の雪の結晶が着きました！写真撮って撮って！」と大興奮。見れば確かに、本校の校章に似た形の結晶がついている。私は大急ぎで拡大写真を撮った。



これがその結晶の写真。「ラッキー結晶」というよりも「奇跡の雪粒」と言いたいような美しさだった。私は最後に「雪は天から送られた手紙」という話をした。中谷宇吉郎博士の有名な言葉である。

【子どものノートより】

「雪の結晶は写真でしか見たことがありませんでした。でも、東京でもあんなにきれいな結晶がふっていたなんて、すごく感動しました」（５年女児）

「ほとんどゆきは、べちゃべちゃだったけど、千こに１こぐらい、きれいなけっしょうがありました。小さな星みたいで、きれいでした」（３年男児）

「すごくきれいで、本当に天からの手紙だと思いました。このままとけないで、かざっておければいいのにと思いました」（３年女児）

「図かんで見たのと同じ形の雪があって、ものすごくおどろいた。また東京で雪がふったら、もっときれいなのをゲットしたい」（５年男児）

「わたしのぼうしの上に、ラッキー結しょうが落ちてきました。キラキラしてました。でも 7 びょうか 9 びょうできえちゃいました。かわいそうだなって思いました」（３年女児）